

● 人権教育 ●

聴き合い学び合う授業づくり・学校づくり

大阪府 堺市立大仙小学校（校長 寺本文代）

〔本校のめざす子ども像〕

- ① つながり合う愉しさを味わう子
- ② わからないとたずねる子
- ③ 難しい課題に挑戦する子
- ④ 課題を本気で考える子

堺市の歴史は古く、遠く室町時代に日明貿易の中継地として賑わい始め、琉球貿易・南蛮貿易の拠点として国内外より多くの商人が集まる国際貿易都市として栄えた。

安土桃山時代には環濠都市を形成。東洋のベニスと言われ、会合衆と呼ばれる商人たちが自治的な都市運営を行い、中世の自由都市となる。

戦国期より鉄砲生産が盛んに行われ、千利休に代表される茶の湯が大成されるなど、非常に文化の高いところである。

本校は、その堺市の中心に近く、大仙古墳のすぐ近くに位置する学校である。

校区にある大仙公園の中には、堺市立中央図書館・博物館があり、緑豊かな中で落ち着いて学習できる環境が整っている。しかし、様々な生活背景の中で学校教育・家庭教育への価値観が多様化している。

I 現状と課題

教育は人権尊重の上に成り立つもので、すべての教育活動が人権教育を基盤としている。しかし、教育の現場は価値観の多様化、いじめ、不登校、学級として機能しない状態の教室等、多岐にわたる課題により、学ぶことから逃避する子どもがふえている。



◆ 大仙小学校の正門

それは、本校でも例外ではない。学ぶことから逃避する子どもを取り戻し、豊かな人格をどう育てるのか。これが喫緊の課題であるととらえ、この課題を開拓することによって、学ぼうとする意欲と同時に自他を敬愛する人権感覚も豊かに育んでいきたいと考える。

堺市が毎年行う「子どもがのびる学びの診断」における児童質問紙項目「自分には、よいところがあると思いますか。」「学校で友だちに会うのは楽しいと思う。」「すきな授業がある。」これらの質問に対し、本校の児童は8割以上の肯定的な答えを出している。

また、学校・学年質問紙項目「児童・生徒は熱意をもって勉強していると思う。」「児童・生徒は授業中の私語が少なく、落ち着いていると思う。」の結果において、本校では年々上昇気味にあるという嬉しい結果が出ている。これはひとえにこれまで、子ども・保護者とともに職員一丸となって努力した結果である。

さらに、一人ひとりの意見や考えが仲間の中で尊重され、すべての子どもが意欲的に授業に参加し、力がついたと思える授業を保障することを継続していく必要がある。教師・子どもが自分の考えをもって授業に臨むこと、一人ひとりの子どもの学ぶ権利を保障することを大切にしていく。

人権教育の基本は、相手の話を徹底して聴くことから始まる。相手を「話をしっかりと聞く」ことで受け止め、その存在を認め尊重することになる。

子どもたちが学習活動で得た新たな知識や経験をもとに次の活動へ進み、自分を肯定的に評価し自尊感情を育てるような授業となるよう変革をさらに進めていきたい。

II 本校の研究

1. 「子どもが学び合う授業」とは

これまでの一斉授業では「学び」は中位層の数人にしか成立していない。授業で何度も発言する上位層の子どもは、その発言はすでに知っていた内容か、簡単に理解できた内容でしかない。黙って聴いている下位層の子どもに学びは成立しないことが多い。このような状況になるのは、教師の授業レベルや教科書が中位層あたりで設定される傾向が強いからと考えられる。



◆ 学び合う大仙小学校の子どもたち

一人ひとりの学びを支えるのは、

- ① 学びたいという意欲
- ② 学びに力を尽くそうとする意思である。

その意欲と意思を喚起するのは、学ぶことは楽しい、学んでよかったという体験であるが、現実にはそれまでの体験から学びに意欲を失っている子どもが少なくない。

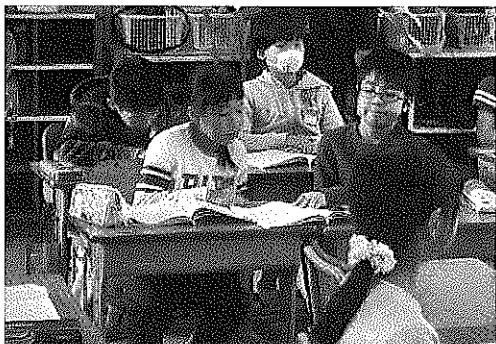
また、意欲はあるが、対象（教材）とどう対話したらよいのかが分からず、学びに取り組めない子どもも少なくない。

いかに優秀な教師であっても、すべての子どもの学ぶ権利を実現することは不可能である。一人ひとりの学ぶ権利を保障するには、子ども一人ひとりが主人公となって互いに学び合う関係を築き、教師と子ども

がつながって授業を改革していかなければ子どもの学ぶ権利は実現することができない。それには、子ども自身が「学ぶ力」をつけることである。

私たち教師は、学びの対象（教材）の質「学びの質」の見直しと対象との対話の仕方の提示が必要である。

様々な「対象（教材）との対話・人との対話・自分との対話」と活動・体験を通して、子どもどうしが学び合うことを確立することにより、子どもが「知りたい」「分かりたい」「できるようになりたい」という気持ちや、一人ひとりが自ら疑問を持ち考えるという主体的な気持ち「学ぶ意欲と意思」を育てることを中心に据えた授業を開拓していくことが大切である。



◆ ペアでの学び合い

2. 「学び」の推進に大切なこと

（1）学びが生まれる環境をつくる

① 外的環境

【しっとりと落ち着いた学校・教室】

「元気で明るい教室」ではなく、「しっとりとした教室」づくりに努める。なぜなら、元気のよい明るい集団づくりでは、大きな声の元気のよい子どもが中心になる。それでは自信のない子どもや細く小さな声でしか主張できない子どもは、居場所がなく

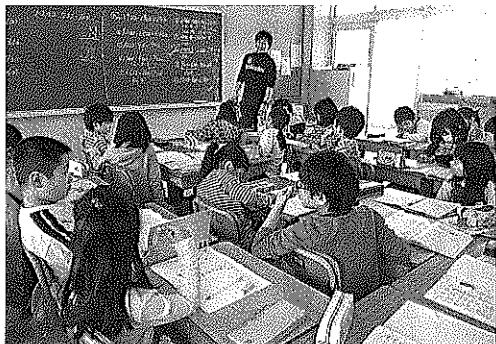
疎外感を持つことになる。

発言者がどんなに声が小さくても聴こうという姿勢と、話すことが苦手な子どもの発言を待てる仲間は、「元気で明るい」ことに価値を置いては育たない。

また、「しっとりとした教室」づくりは、聴こうという姿勢や待つだけでなく、嫌な音（無駄なしゃべり声・聴きとりにくい発言を遮る音）といい音（ノートに鉛筆で書く音・お節介でないアドバイスの声）を認識させる。

② 座 席

授業は全員が参加するものだという認識を持たせ、相手の顔が見える学習の場を保障する。教師が教える授業から子ども同士が学び合う授業を中心とするために、座席はコの字型に配置し、発言している仲間を見て聴けるように配慮する。



◆ コの字型の座席

③ 人的環境

【学び合い】

学びは、「対象（教材）との対話・人との対話・自分との対話」によって生まれる。ひとりの学びが基本であるが、一人で学べる内容はごくわずかで限られている。

そこで、人との学び合いが必要となる。それは決して「教え合い」ではなく、「学び

合い」でなければならない。わからない子どもにわかっている子どもが教えるという関係では、教えてもらう子どもは教えてくれるのを待つ子どもになる。自分で克服しようとする力につくことができない。

わからない子が「ここ、教えて。」と素直に言える雰囲気をつくることや、請われて教えることによって教えた子どもも学ぶことができるということを大切にする。

それは、学び合うことそのものが学びであると考えるからである。



◆ コの字型の座席：音楽室

④ 学びの形態

学びには、一人の学び・グループでの学び・全体での学びがある。

グループでの学び、全体での学びは、一人ひとりの学びを高めたり拡げたりするためにある。人との学び合いが一人ひとりの



◆ グループでの学び合い

学びを支え、人と学びあってよかったという体験が一人ひとりの学びに対する意欲、意思を高めると考える。

ゆえに、少人数（グループ・ペア）学習の導入もまた大切な要素である。（低学年は二人以上ではなかなか聴き合えないことが多いので、ペア学習を行うようにしている。）少人数での活動の中で自分の思いをもつことができると、全体になった時でも他の発言を聴き、自分の思いを深めていくことができる可能性が高まると考える。

一人ひとりの子どもが、自分の意見や思いを聴いてもらっているという実感が持てると、話そうという意欲が出る。ペアやグループにしたとき、互いの良さが引き出せる組み合わせを考えてできるだけ男女混合になるように、席替えは教師が主導で行う。

(2) 学び合いを作り出す教材の提示

学びとは対象（内容）との出会いと対話であり、他者（仲間や教師）との出会いと対話であり、自己との出会いと対話であると考える。私たちは他者との協同を通して、多様な考えと出会い、対象（教材）との新たな出会いと対話を実現して自らの思考を生み出し吟味することができる。

佐藤 学 著「学校の挑戦」より

① 望ましい課題－1

学びを実現するには、多様な考え方を出せる課題に取り組むことが大切である。課題の内容に魅力や探究がなければ、学ぶ意欲や意思は起こりにくい。

決まり切った答えを求める課題、答えようもない課題など、子どもたちが発言する意欲を持てない課題でなく、子どもから多様な考えが出される課題を設定するように工夫する。

② 望ましい課題－2

元気よく発言する子どもはその課題についてすでに知っていたか、容易に理解できる内容であったことが予想される。やればすぐにできる、わかるというような課題は魅力がなく、探究心も生まれにくい。すでに知っていることやわかっていることを習熟しても、それを「学び」とは言い難い。

学びは、すでに知っていることから出発して、すでに経験したことや現在の能力を超えて未知の世界を探し出し、新たな自分を形成する過程である。それは喜びであり、楽しみでもある。

しかし、最後まで自分一人で取り組むよう要求すると、投げ出してしまう子どもや、自分はだめだと思ってしまう子どもが出てきてしまう。そこで、自分一人では解決しにくく課題（背伸びとジャンプができる課題）をペアやグループで話し合ったり、考えを出し合ったりすることにより学び合いが生まれてくる。



◆ ペアでの学び合い

(3) 教師の姿勢と役割

① 教員一人ひとりの研修テーマ

すべての教員が自分の研修テーマをもち、意識しながら児童に向かう。日々の授業づくりの際も学びを推進することとテーマをつなげる。

校長	互いを尊重し高め合える教育と同僚性の構築
教頭	一人ひとりを大切にする学び合うことに、喜びを感じる児童・授業・人づくり
1－1	聴き合うことを大切にし、自分の思いを伝えられる授業をめざして
1－2	友だちの話を聞くことを大切にし、安心して思いを出せる授業づくり
2－1	聞く、聴き合える授業づくり
2－2	聴き合うことで自分の考えを深めることができる授業づくり
2－3	一人ひとりが聴き合い、学び合う授業づくり
3－1	一人ひとりが大切にされる、聴き合う関係づくりをめざして
3－2	聴き合うことを大切にし、自分と相手の違いに気づく授業をめざして
4－1	聴き合うことを大切にし、自分の思いを伝えられる授業をめざして
4－2	聴き合うことを大切にし、学ぶ意欲を持ち続けられる授業をめざして
5－1	聴き合い学び合う楽しさを味わい、学びに寄り添う授業づくり
5－2	思いを聴き合い、支え合う授業づくり
6－1	聴き合うことを大切にし、子どもの学びによりそう授業づくり
6－2	一人ひとりが教材に出会い、互いが支え合う授業をめざして
みどり	友だちと学び合い共に成長し合える授業づくり
みどり	聴き合うことで学びや関係が深まる授業づくり
みどり	自分の考えを伝えられ、相手の意見を聽ける授業づくり
みどり	友だちの話を聴き合い、自分の考えを言える授業づくり

新任指導	互いの考えを聞き合い学びが深まる授業づくり
算数	聞き合い学び合う授業づくり
音楽	聞き合い、響き合う授業づくり
理科	聞く話すから 聴き合い伝え合う授業へ
養護	自発的に心身の健康に向き合う児童の育成

② 授業に対しての心構え

- 「子どもと教材」「子どもと子ども」「教師と子ども」をつなぐことを大切にする。
- 一人ひとりの「学び」の実現において授業を追求する。授業の展開に収斂しない。
- 徹底した教材研究をしたうえで、教材や子どもの前で常に謙虚であること。教えこもうとしないこと。
- できる限りトーンを下げた声で、選んだ言葉で語りかける。子どもとの間に対話的なコミュニケーションを成立させる。
- 常に子どもから「学ぶ姿勢」を忘れないようにする。
- わからない子どもが、隣りやグループの子どもに「ここ、どうするの?」と訊ねることができるよう、具体的に訊き方やタイミングを指導する。
- ペアやグループにしたとき互いの良さが引き出せる組み合わせを考え、席替えは教師が行う。

③ グループ学習での教師の役割

- 一人ひとりの学びを保障するためにペア・グループ学習を取り入れる。(グループ学習が目的でなく、学ぶために話し合いを行うことを忘れない。)
- 男女混合の4人までのグループを組織

する。前述したように子どもたちの良さが引き出せるような組み合わせを考慮した席替えをする。(それ以上だと学び合うかかわりが十分に形成されない。)

- グループ学習を始めたあと、子どもが一人残らず学び合いに参加できるよう援助する。(参加できない子どもをグループの子どもとつなぐ)
- グループでの話し合いや学び合いが起こりにくいグループに対して支援を行う。
- グループ学習で学びが成立している限界は進めるが、学びが成立しなくなる直前で終えるようにする。
- グループでの学びは、個々人の多様な考え方や意見の多様性を尊重する。班長やリーダーを作らず、代表して意見を言わせない。個人としての意見として発言させる。



◆ 子どもたちの学びをつくる担任の先生

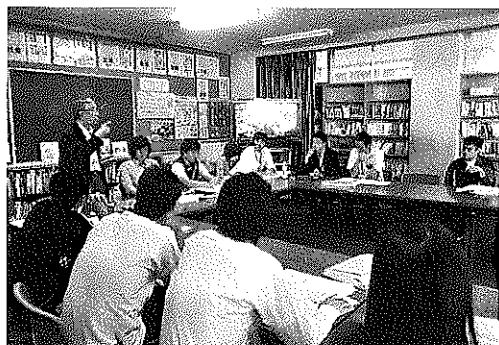
(4) 討議会の持ち方

① 討議会

「教師と教師」がつながり、成長するために行なうようにしている。授業を参観した後、校内の全員の教師が「教室の子どもの学びの事実」を観察にもとづいて、どこで学びが成立し、どこで学びがつまづいたかを話し合う。

参観者が授業者に「助言」するのではなく、

教室の事実から参観者が教室で「学んだこと」を自分の言葉で発言し交流する。同僚への配慮と学ぶ者の謙虚さを大切にした討議会にするよう努力する。



◆ 討議会のようす

② 校内研修会とふりかえり

年7回の校内研修では、全員が授業し、外部からの講師（元宝塚市立小学校校長・小畠公志郎先生）を招へいし、ご指導をいただく。

[10月16日の校内研修会]

学級	教科	[单元] 教員それぞれのふりかえり
1の1	国語	[詩 かえるのびよん] 自分の思いが言えない子には、文にかえすために音読させるようになるとよい。友だちの話を受けて話ができる子には、話を聞くようにするとよい。ペアで読むときは、どちらが本をだすのかを交互にしていけばよい。
1の2	国語	[詩 あおいえお・ん] 「どこが好き？」と尋ね、手を挙げさせててもよい。その時、0人だったところがあつたら「ここ、先生はおもしろいと思うな。」などと声をかけ、目をむけさせる。ペアで読んだり、ペアで伝えあったりする活動を多く入れる。
2の1	国語	[ことばを楽しもう] レベルの高い課題の場合は、書く場面でも、1枚のプリントでペアで考えさせるのがよい。低学年では、「今の○○さんの言ったことをどう思う？」というような、具体的な問い合わせ話し合いやすい。

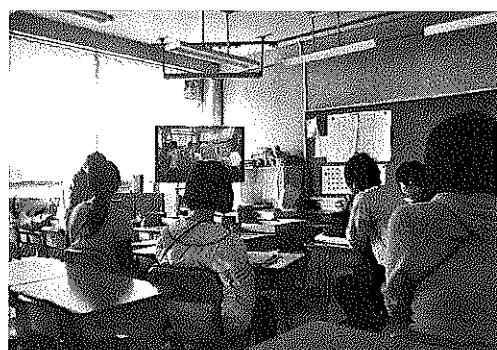
2の3	国語	[わたしはおねえさん] 発問は、もっと具体的に「ここのことについて、お隣りとお話ししてみて」と伝えるほうがよい。ペアでも、後押しが必要なペアがあるので、直接行って話をするか、誰かが言ったことについて考えてみることに取り組んでいく。
3の1	国語	[ちいちゃんのかげおくり] 登場人物の行動や会話から、情景や状態を読み取ることができた。だが、音読がすくなかつたため、物語文を分析するように読みこんでしまったようを感じる。音読に戻すように心がけたい。
3の2	算数	[かけ算のひっさん] 困ったところ、分からないとろについて考えようとする態度は少しづつ育ってきているようを感じる。しかし、考えをなかなか言葉にできずに戸惑っている児童がいるので、説明しやすいよう具体物を用意するなど手立てを考えていきたい。
4の1	算数	[整理のしかた] 算数的要素を含んだ課題、たくさん考えやこたえができる課題が良い。ペアで問題プリントを1枚のとき、グループで1枚もしくは2枚必要となる場合について、助言いただいた。
4の2	算数	[平行と四角形] いくつもの解き方がある問題なので、子どもの多様な考えに反応できるよう、教師が教材研究をしっかり行ったほうがよい。
5の1	国語	[枕草子] グループでの読みはあったが、指名読みを多く入れる。誰かが何か言ったら、読みにもどす。
5の2	道徳	[田中さんのジレンマ] クラスの雰囲気はよかった。中高生向きの答えの出ないような読み物教材でも十分考えることができる。最後は賛成・反対の意見を書かせるのではなく、「自分だったらどうする」と問うようにしたい。

6の1	国語	〔旅をする木〕星野道夫 漢字の読みがわからないときは辞書ではなく、漢字の文字自体の意味から想像させたり、文脈から想像させる。何度も読みにもどしながら、イメージを深めていく。	算数少人数	〔角柱と円柱の体積〕 課題について考え合うことはできているが、課題のレベルが低く「わからない」と疑問が出てくることが少なかった。課題のレベルアップを図り、学び合う機会を増やさなければならぬ。
6の2	社会	〔人々のくらしのようす〕 世界との関わりを比べさせながら考えさせるとよい。また、発言する際は、立ったまま話を言わそうとすると、緊張する児童もいるので、座ったまま話をさせると自然な形で発言ができる。	音楽	〔越天樂今様〕 歌唱、定着していないでもグループで歌ってみる。1つのグループが歌っているのを聞き、グループで歌いを繰り返す。リズムや音はここで定着する。たいていの曲は、歌うことによってイメージが出てくる。歌っている間に話をはさむ。
みどり1	国語	〔主語と述語〕 「これは、○○だ。」の文作りでは、Oさんの発言につられて、Aさんがスムーズに答えることができた。児童二人での授業は問い合わせに対し交互に発言させていくと答え易い。	理科	〔とじこめた空気や水〕 <ul style="list-style-type: none">・ ポイントは、既製の玉ではなく、紙玉、よく飛ぶ玉を工夫して作るところに学びが生まれる。・ 工夫したことをグループの友だちに説明する時間が伝える力を育てる。全体発表は言える子には言わせない。
みどり2	道徳	〔いのちくらべ〕 低学年においては、「どう思う（感じる）？」など幅広い質問をすると困惑する場合がある。そのときは「～についてどう思う？」「～さんの意見についてどう思う？」などと質問する内容をかえてあげるとよい。		
みどり3	算数	〔体積〕 児童と教師が一対一の場合、児童がつながれる相手は教師しかいないため、教える授業ではなく会話の中でのやり取りが重要である。単位の感覚が実感できるように、実物の大きさの箱を使って、課題に取り組むことができた。		
みどり4	国語	〔大造じいさんとガン〕 読めない漢字は文脈から想像させてみる。詰まても「この漢字はどう読むと思う」と聞いてみる。文章も読み間違えても何故、そう読んだのかを考えるように促す。		
新任指導	算数	〔1年 3口のけいさん〕 文章を読んだ際に、多様な意味にとれる場合は、多様な考えを出させると良い。どのペアも良い雰囲気で取り組んでいた。発表の際は教師の立ち位置を意識し、子どもが子どもに向けて発表する姿勢をさらに身につけさせていただきたい。		

上記のふりかえりは毎回校内研修の後、記入し配布される。

③ ビデオカンファレンス

学期に1度はそれぞれのクラスの授業のようすをビデオに撮り、全員で見る時間を



◆ ビデオカンファレンスのようす

つくっている。そこでも互いに教室の事実から「学んだこと」を発言し交流する。

3. 自主公開授業研究会

11月14日(土)

今年度で第3回目となる公開授業研究会には、富山県、岡山県などから94名が参加し、250名以上のご参観をいただいた。

当日は1時間目が学習参観であり、保護者や地域の方々と入れ替わって2時間目と3時間目が公開授業である。全ての教室が開かれ、全ての教師が授業公開を行った。



◆ 公開授業研究会のようす

① 子どもが変わる

公開授業研究会になると、当日の子どもたちは普段以上の意欲と学びが深まる姿を見てくれる。これを契機に、一段と子どもたちが学び合い方を学んでいく。それだけでなく、子ども同士が互いに支え合ったり、寄り添ったりするようにもなっていく。

その繰り返しの積み重ねにより、高学年になるほど、相手のことを認め合う関わりが見られるようになる。

このような子どもの変容には、やはり教師の姿は大きいのである。この日までに、教師は目の前の子どもたちの僅かな変化を捉え、それを日々の授業に生かそうとする。そうすると自ずと、教材研究を深め質の高

い資料や課題づくりに向き合う教師の姿が、子どもたちに伝わっているのではないかと考える。

② 教師が変わる

午後からの中心授業では、二人とも2年目の教師であった。日頃から、子どもたちの姿は、教師の人柄が映り、実際に穏やかで柔らかな雰囲気が教室に広がっているのである。

当日の授業は、2年目とは思えないほど頼もしい授業を見せてくれ、研究協議会やアンケートでは、参観者から感動の声をたくさんいただいた。二人とも、公開授業研究会を通して、更に成長できたのである。これまでの授業観や教師観、子ども観が変わっていったのである。それには、子ども、教材、同僚、多くの方々から学び続けてきたのである。

公開授業研究会を迎えるにあたり、日に日に職員室で授業や教材の話が交わされ、支え合い、学び合う教師の姿が目に見えるようになってきた。この姿は、年間で一人10回程の公開授業を行う本校では、よく見るようにになっている。

公開授業研究会は教師が育ち、一つにつながり合うことで、素晴らしい同僚性を深めるのである。



◆ 講演（佐藤學先生）のようす

③ 学校が変わる

厳しい状況にあった6年前の始業式。非常にざわざわした騒がしい中で行われ、転入生の保護者からおしかりを受け、当時の校長が「必ず静かな状況でできるようにします」と伝えた。スマールステップを合言葉に、学校の立て直しとして取り組んだのが授業改革。現在では静かな状況で、式も全校朝礼もできるようになった。



◆ 朝礼のようす

子どもに対する指導が困難を極める状況において、子どもを変えるのは、学びでしかない。授業でしか変えられない。危機感をもち、子どもを落ち着かせたい、子どもを学びに向かわせたいという切なる思いから、授業改革は出発した。

子どもの学びが育ち、子どもの関係が育つことで、教師の同僚性が育ってきた。

そして、子どもの間でも、教師間でも寄り添い合い、支え合って、苦労も喜びも、ともに味わって行こうとする意識が生まれ、学校が変わってきたのである。

本校の公開授業研究会は、教育委員会等から指定されて行うものではなく、教師の方から実施したいとの声が上がり自主的に行い始めた。

公開授業研究会をするにあたり、日常の授業を公開し、研修の成果や課題を明らかにし、授業の創造と学校の改革へと結びつ

けるようにしていく。本校の実践は始まつたばかりであり、授業実践を続け、教師としての授業の向上と子どもの学びを保障していきたい。

III 今後の取り組み

1. 学校全体として

- すべての教育活動が人権教育の視点で行う。教師がそういう意識を持って子どもたちにかかわっているかを校長は授業参観、教室巡回する。
- 次回自主公開授業に向けて全員で研修を積む。

2. 各委員会で

- 支援学級の児童理解のための取り組みの計画と実施をする。
- 教科研修でも人権教育が原点にあるか話し合う。
- 研修が「子ども一人ひとりの学びを保障する」方向であるか、研修のための研修になっていないか等を常に見極める。「授業の展開」に収斂した時は軌道修正する。

3. ひとりひとりが教師として

- 子ども、保護者に寄り添い、常に児童理解に努め信頼関係を築く。
- 「あなたのこと大切に思っている。」のメッセージを込めて、注意すべき時はしっかり叱る。ぶれないこと、貫くこと。
- 保護者との協働により、基本的な生活習慣と家庭学習習慣、道徳観の確立をめざす。(授業参観・懇談会・校報・学年通信・学級通信等を通じて啓発の努力)

(校長:寺本文代)